

保育所と保育士養成校の連携による地域における子どもの安心・安全、 人的環境のあり方に関する研究

研究代表者	長谷川 育代（万願寺保育園園長）
共同研究者	高橋 久雄（昭和女子大学教授）
	松田 典子（文教大学専任講師）
	高橋 紘（至誠保育総合研究所所長）
	三浦 修子（至誠第二保育園園長）
	廣瀬 優子（しせい太陽の子保育園園長）
	高橋 滋孝（至誠あずま保育園園長）
	高橋 智宏（至誠いしだ保育園園長）

研究の概要

この研究は保育所と保育士養成校の共同研究により、子どもの安心安全のあり方、方策について地域住民を含めた人的環境から明らかにし、更にそれを強化する仕組み作りについて研究することを目的とするものである。今、地域に開かれた保育園は、地域の子育て家庭が利用するばかりではなく、地域の人同士を結び付ける可能性を秘めている。又、地域の人が持っている様々な力を引出し、地域の暮らし、働く人を結びつけていくことは人々の絆を強め安心感のあるまちづくりの大きな要素であり、子ども達が育つ環境として重要である。

孤立化が言われている現代社会に於いて、次世代の養育を家庭と共に行っている保育園が地域の人のつながりをどのように構築し、子ども達が育つ安全なまちづくりへの貢献及び保育園と地域の新たな関係作りの意味は大きい。

本研究では地域住民の協力により、子ども達の安全管理を考察し、保育園が中心となり、地域の触れ合いを通して、地域力を引出し、地域との協力体制をどのように構築していくか研究を深めた。

1. 保育園の散歩の安全管理について、保育園にヒヤリング調査を行い、安全対策の参考とした。園外の安全管理についてはマニュアルを作成している園が少なく、地域に緊急時の対応、協力者を構築している園はなかった。子ども達が地域で安心して過ごせるために、地域の人との触れ合いや関わりを通しての安全管理の必要性があった。
2. 地域住民の協力により子どもの安全安心を確保しながら、地域とつながり、地域を結びつける仕組みを考える。研究方法は保育園の散歩コースの方に「地域における子どもの安心、安全に関する意識調査」をお願いし地域における人のつながりについての現状をアンケートにより明らかにした。

地域にはPTAが中心となり子ども達を犯罪から守るために、ピーポー君の家、駐在所、事業所の協力のもと安心、安全を構築している『フォーマルなつながり』がある。フォーマルなつながりも重要であるが、保育園は地域と『インフォーマルなつながり』を持つことで、子ども達が安心、安全に地域に出ることができるのではない。又、地域の持っている力を引出し保育園とつながり、地域にとって保育園の持っている資源は何が必要なのかアンケートより考察し検証することができた。この結果をもとに『地域人材マップ』を作成した。

3. この調査は養成校の学生と保育園が散歩コースの近隣にアンケート配布、地域主催夏祭りも共同で参加することができた。地域における奉仕活動を実践し、経験を豊かにすること同時に、市民としての自覚が持ち、学生の時から地域への貢献を育むことで、将来地域を大切にすることができるのではないかと推測した。コミュニケーションラーニングを通し学生は地域を学ぶことができ、保育園は学生に対して奉仕活動の場を提供することで将来、人々の絆を強め安心したまちづくりを担う人を育てる役割を担う可能性を示すことができた。

キーワード：地域、つながり、子どもが育つ環境、地域人材マップ、コミュニケーションサービスラーニング

はじめに

今、地域に開かれた保育園は、地域の子育て家庭が利用するばかりでなく、地域の人同士を結びつける可能性を秘めている。又、地域の人々が持っている様々な力を引き出し、地域に暮らし、働く人を結びつけていくことは人々の絆を強め安心感のあるまちづくりの大きな要素であり、子ども達が育つ環境として重要である。

孤立化が言われている現代社会に於いて、次世代の養育を家庭と共に起こっている保育園が地域の人々のつながりをどのように構築し、子ども達が育つ安全なまちづくりへの貢献及び、保育園と地域の新たな関係づくりの意味は大きい。

保育園において身近な安全を考える時、子どもの事故を防ぐことは重要な課題である。組織的な取り組みとして、安全に対する予防と対応が機能しなければならない。

子どもたちが園外に出た時の事故や犯罪から子どもを守るためには、ハードウェア（モノ・環境づくり）とソフトウェア（親や保護者、地域住民とのかかわり）両方が必要である。（野村 歡『子どもを事故犯罪から守る環境と地域づくり』）

本研究では、ソフトウェアである地域住民の協力により、子ども達が地域に出た時の安全管理を考察するとともに、保育園が中心となり地域の人との触れ合いやかかわりを通して、地域力を引き出し、地域組織との協力体制をどのように構築していくか研究を深めた。

I 保育園の散歩の安心・安全について

保育園の散歩の安全対策について参考とするために聞き取り調査を行った。

（1）目的

保育園が利用している散歩コース上で、日常的に園児を見守り、事故や不審者に遭遇した際には緊急避難等対応してもらえる家や施設、及び協力者の必要性について、目的別（公園等）に考える。

（2）方法

平成25年10月に調査協力園で共同研究者がインタビュアーとなりインタビューガイドに従い口頭で聞き取り調査委員が書き取った。調査協者は東京都7園、福島県1園、埼玉県1園、大阪府1園合計10認可保育所の園長、主任保育士にインタビューを行った。

倫理的配慮はインタビュー開始前に内容を口頭で説明し同意を得た。

（埼玉県、大阪府はメールと電話で調査を行う）

（3）定義

散歩は保育園の敷地の外において行う保育活動とい

う。ただし、午前中に出発しおおむね11時30分頃に帰園するものをいう。11時30頃までに終了する場合でもプラネタリウムなどの公共施設を利用する場合は園外保育と位置付ける。

（4）調査内容

保育園の散歩は通常の園内における保育では触れることのできない、野原、公園、河川などの自然や社会事象についての学びの場である。子ども達にとって欠かすことのできないカリキュラムである。しかし、散歩や園外中の事故の報告では、平成16年11月17日、世田谷区で園児が、兵庫島公園付近での園外保育活動中に、多摩川に転落し死亡する事故や、埼玉県では、2006年9月25日午前に保育園児の散歩の列にクルマが突っ込み、園児2名が死亡、3名が重体など死傷者を出した事故（28日に重体の園児が1名亡くなり、死亡は3名になった）（読売新聞）等暗いニュースが報道されている。

保育園ではどのように散歩時の安全管理を行いマニュアルを作成しているのか、東日本大震災3.11以降（以下3.11）、安全管理をどのように見直したかなど以下の項目について聞き取り調査を行った。

- ① 散歩についてのマニュアルを作成しているか
- ② 目的地に行くまでの道のりが決まっているか
- ③ 散歩コースで緊急時に対応してくれる施設、協力者を構築しているか
- ④ 3.11の震災以降マニュアルの見直しをしたか

についてインタビューを行った。

（5）インタビューの結果

ア、回答数10園

イ、各項目の結果

①散歩についてのマニュアルを作成しているか

はい 2園 いいえ 8園

散歩マニュアルについては作成しているところは2園だった。内容は持ち物、移動中の注意事項、遊ぶ前の約束の確認、遊び中の人数確認、周辺マップ等が記載されていた。散歩マニュアルは作成していないが園外保育のマニュアルを作成している保育園もあった。内容は園外保育を達成するための安全・確実な手順、目的地の選定基準、目的地活動内容、交通手段の選定基準、引率体制基準、保育園の体制、実施基準について定めている。緊急時の対応を想定し緊急車両がどこまで入ってこられるのかなど、同時に事故後の緊急対応についても定め、職員の行動基準が記載されていた。

②目的地に行くまでの道のりが決まっている

はい 3園 いいえ 7園

目的地までの道のりが決まっているかについては「はい」3園と少ないが、公道を歩くが決められているが3園あった。目的地までの道のりが決まっても、変更がある場合、前もって申告することが決まっている。道

のりが決められている理由として、緊急時の対応でその場所にすぐに行くことができるという理由であった。

③散歩コースで緊急時に対応してくれる施設、協力者を構築しているか

はい 0 園 いいえ 10 園

散歩中、緊急時に対応してくれる施設や協力者を構築しているかでは、構築している保育園はなかった。調査園ではトイレを地域の方に借りたことがあり、保育園とつながりがあったのでお願いしやすかったということである。

3.11以降、園外保育の見直しをした園では、園外保育の目的場所近くに保育園を探し連絡を入れ緊急時や災害が起きた時、避難できるようにお願いしている保育園があった。

④3.11の震災以降マニュアルの見直しをしたか

はい 1 園 いいえ 9 園

3.11の災害の後、園内の災害における安全マニュアルの見直しとともに、散歩マニュアルを見直したかでは、散歩マニュアルのある園は見直しをしたという回答があった。震災後、散歩マニュアルはないが園外保育マニュアルを作成した保育園があった。

牧野氏によると3.11以降、全国の保育園で安全管理、危機管理の見直しが行われていると述べているが、散歩や園外保育に関する安全管理については見直しされていないところも多い。

ヒヤリングによる調査の回答を下の表にまとめた。

調査した保育園の散歩中の事故やヒヤリハットでは、子どもが足を滑らせ川に落ちた、公園では雲梯中、お友達が足を引っ張り転倒、ブランコに追突し口部に裂傷、

横断歩道に設置してある旗の取り合いで目を外傷、走っている途中の転倒などがあげられたが、大きな事故は幸いにもなかった。ヒヤリハットでは道路にとびだす、散歩の途中にいなくなったなどがあげられていた。

A 保育園では3.11の震災で園外保育（お別れ遠足）に出かけ、電車で1時間30分かかるところにいた。帰り道、大きな揺れを感じ子どもに地震を知らせた。子ども達は訓練どおり安全体位を取り保育士は子どもに覆いかぶさるようにしていた。その時、通行人3名が自己判断で保育士と同じ体制で子どもを守るため力を貸してくれた。揺れがおさまると子ども達に声を掛けてくださった。2回目の揺れは場所を移動したところで起きたが、やはり通行人が子どもを守るために力を借りることができ、心強かったとの事であった。

3.11の後、園外保育の行き先の検討を行い歩いて帰ってこられる場所に変更した。

他の園でも園外保育で公共機関を使用し1時間30分かかかる水族館に行っていたが、災害が起きても徒歩で帰園できる場所に変更していた。またバスを使用する園は、災害時の水、食料を積み込みでかけているとのことである。

B 保育園では散歩マニュアルを作成している。3.11以降、散歩マニュアルの改訂を行った。内容は突然の災害が起きた時、携帯などで保育園に連絡が取れないので、このような緊急事態は子どもの安全を第一に考え自己判断し行動するという行動基準であった。

大きな災害を経験している福島県郡山市のL保育園を

表1 散歩における安全管理調査

	散歩マニュアルはあるか	公園に行く散歩の道は決まっているか	散歩コースに協力者などがいるか	3.11の後に散歩についての安全対策の見直しをしたか
A 育園(東京都)	園外保育はある	いいえ 公道を歩く	いいえ	園外保育について
B 保育園	はい	いいえ 公道を歩く	いいえ	はい
C 保育園	いいえ	いいえ 公道を歩く	いいえ	いいえ
D 保育園	いいえ	なんとなく	いいえ	いいえ
E 保育園	いいえ	はい	いいえ	いいえ
H 保育園	いいえ	はい	いいえ	いいえ
I 保育園	いいえ	なんとなく	いいえ	いいえ
J 保育園(大阪府)	はい	はい	いいえ	いいえ
K 保育園(埼玉県)	いいえ	なんとなく	いいえ	いいえ
L 保育園(福島県)	いいえ	なんとなく	いいえ	3.11より散歩に行っていない。散歩に行けるようになった時、変更の必要性を感じている

訪問し、散歩についてヒヤリングを行った。L保育園では3.11以降、戸外活動が禁止されているので散歩に出していない。

園庭は土の入れ替えを3度おこなった。訪問した日は平成25年11月30日であったが、除染をして放射線量は低くなり、やっと園庭で10分遊べるようになったとの事である。

園外は除染が進まず放射線量が高いので、散歩に行くことができない。

大きな災害（3.11）を経験した保育園で散歩についての安全管理の中で、地域住民とのつながりについて、ヒントがあるのではないかと予想したが、今回の調査ではヒントを得ることができなかった。

F保育園は散歩マニュアルを作成しているが、今回の震災で散歩マニュアルの改訂を考えているとの事である。（今散歩に行けないので、行けるようになってから改訂する）

ヒヤリングより保育園の散歩や園外に出た時の状況や安全対策の実情が見えてきた。どの保育園もあらゆることを想定して安全管理に努めているようだが、子ども達が園外に出た時の安全管理・危機管理について考えていかなければならない。

牧野は「開かれた保育園を推進し、園関係者、地域住民が心を通わせる中で子どもを見守る体制が必要であり、子ども達が園外に出た時の安全管理・危機管理マニュアルの作成が必要だと述べている。

（福島県の保育園で調査を行ったが、復興途中で散歩に出られない状態であるのに相手の心情に不適切なヒヤリングをしてしまったのではないかと反省している。）

Ⅱ 地域における人のつながりについての現状を明らかにする

（1）アンケート調査目的

子どもたちが地域で安心・安全に過ごせるために、保育園の地域の中での認知度、地域のニーズ、現状を把握することが必要となる。地域を知ることによって散歩のリスクが軽減され子どもたちの活動が広がる事が期待される。その上でどのように地域へアプローチし関係を深めていけるかまた、保育園は地域にどのような形で貢献できるか考察していきたい。

対象地域は東京都の西に位置し、2つの大きな河川に挟まれ、自然が多い閑静な住宅街で調査を行った。

（2）方法

アンケート配布方法は平成25年8月6日、12日の2日間て研究園の散歩コース4カ所を選び散歩コース近道の方に「地域における子どもの安心・安全に関するアンケ

ート」を149件配布した。配布の方法は養成校の学生6名と職員2名が共同で各世帯を訪問し、調査についての説明した上、質問用紙を配布、回収は郵送にて行った。訪問時に不在の世帯は郵便受けに質問紙を投函した。質問紙の他に法人の要覧、粗品としてボールペンも同封し回収率の向上を図った。

倫理的配慮はアンケート配布時に調査の目的、調査機関を明示し、個人のプライバシーに関する氏名、連絡先等情報を受けなかった。ただし、調査報告書の郵送を希望される方は記入していただき、記入して頂いたものについては、報告書を送るだけのものに使用した。

（3）調査内容

地域にはどのような方が住んでいるのか、保育園に対する意識、関心について、地域の方から保育園に協力して頂けること、地域における子どもの安心・安全への関心について、アンケートにより明らかにした。

（4）調査用紙の配布数と回収率について

表2 各地域の調査用紙配布数と回収率

	受け取り数	不在投函数	回収数	回収率
A公園（M地区）	16	15	16	51%
B公園（I地区）	4	7	3	27%
C公園（O地区）	20	31	28	54%
T川の堤防	19	17	18	50%
合 計	59	70	65	43%

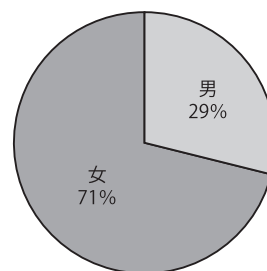
*全体149件配布内20件で受け取り拒否

（5）調査結果について

1. あなた自身について

この項目では全項目において回答率が高かった。性別で見ると女性の回答率が高く、全回答者65名中46名と70%以上を占めた（図1）。

図1 アンケート回答者性別

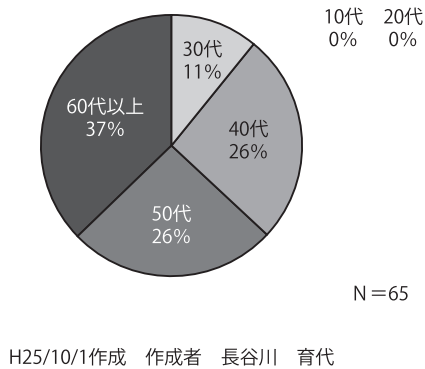


N=65

H25/10/1作成 作成者 長谷川 育代

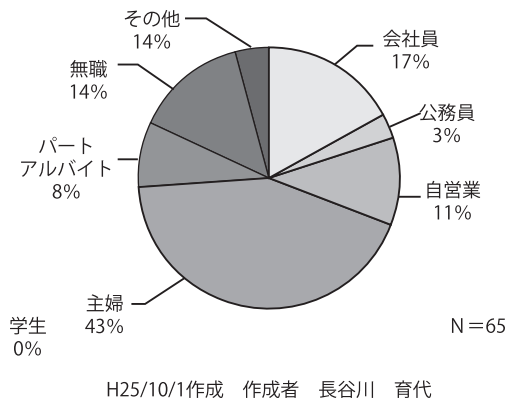
世代別で60代以上が最も高く65名中24名と30%以上、次いで50代及び40代が共に26%。全回答者数の半分以上(41名)を50代以上が占めている。(図2)

図2 アンケート回答者年齢



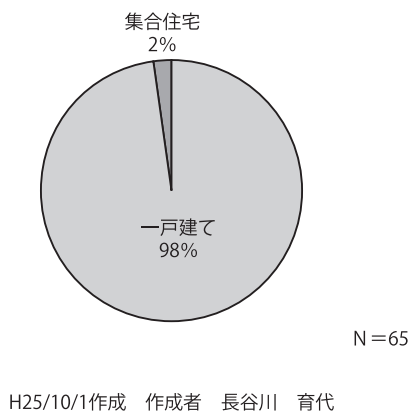
職業では主婦が最も高く65名中28名で40%以上と時間に余裕のある方が回答してくれていると推測される。(図3)

図3 アンケート回答者職業



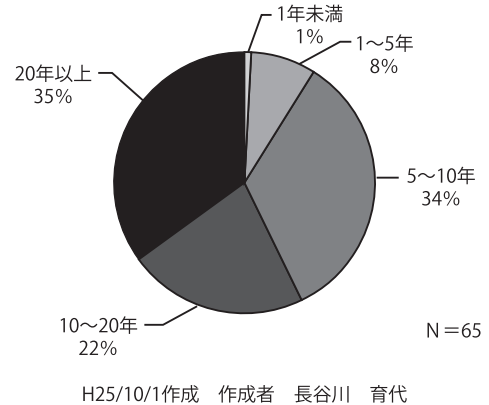
住居形態調査対象を一戸建て中心に行った。集合住宅については、これから調査を行う。(図4)

図4 アンケート回答者住居形態



住居年数では20年以上が最も多く65名中23名で35%、10～20年が22%と10年以上住んでいる世帯が60%と高い割合を占めている。(図5)

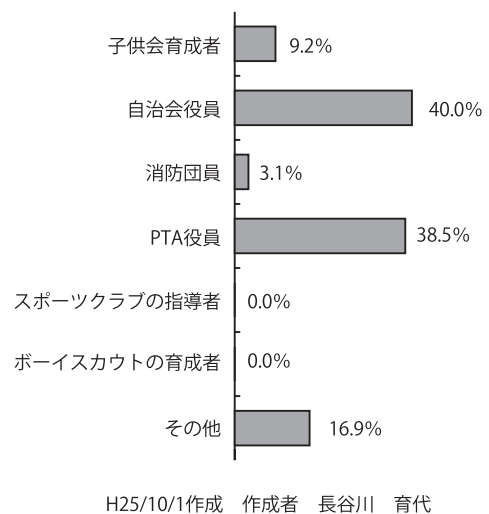
図5 アンケート回答者在住年数



「経験がある」が71%で高い割合を占めている。ここでは複数の項目に印をつけられる方が多く、役割では自治会役員を26名、PTAを26名と多かった。子ども会育成者は6名9.2%と少なく10年以上住んでいる方が多かったのもう少し多いのではないかと予想したが10%を切る数字となっている。この地域では、10年以上生活していて地域の役割経験がある人が多い。

その他の役割では地域のおやじの会、老人クラブ、野外子育て広場、ワンワンパトロール、保護司、民生児童委員、ピーポー君の家の記述があった。

図6 アンケート回答者地域の役割



法人施設の地域の認知度は「知っている」65名中、59名で91%と非常に高い。(図7-1)

図7-1 当法人の認知度

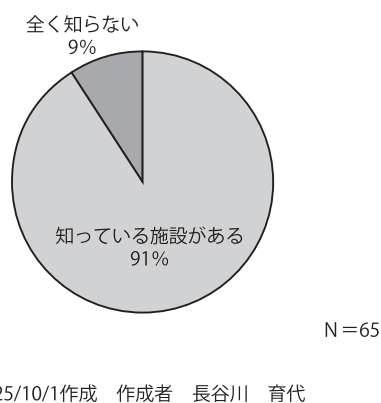


図7-2は研究園のM保育園、I 保育園の地域で調査を行った。M保育園は開設12年で78.5%。I 保育園は開設より2年経過していないが44.6%認知度は高いといえる。モノレール一駅離れているS 保育園は63.1%で創設50年を超え、しっかり地域に根差している。

図7-2 知っている施設は？

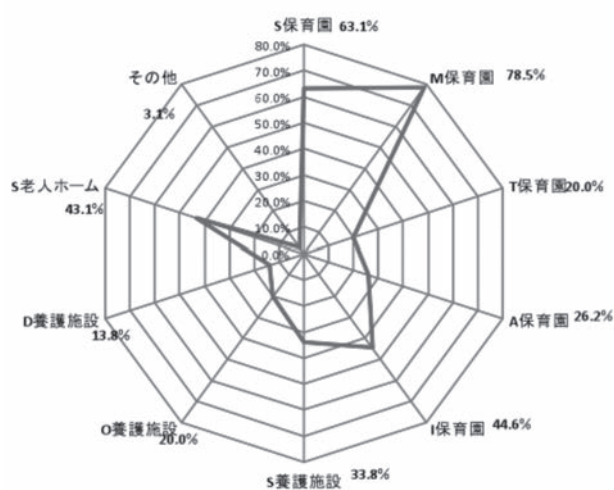


図8-1 保育園との関わりはありますか？

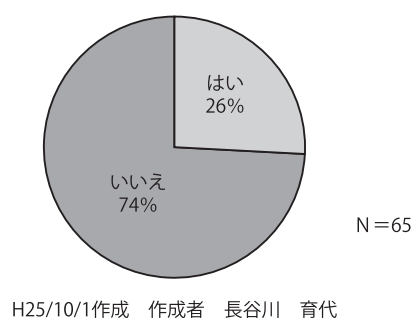


図8-2 関わり（はい）の内容

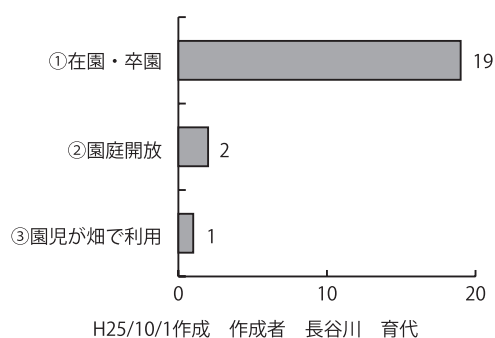


図8-3 はいと答えた人の内容

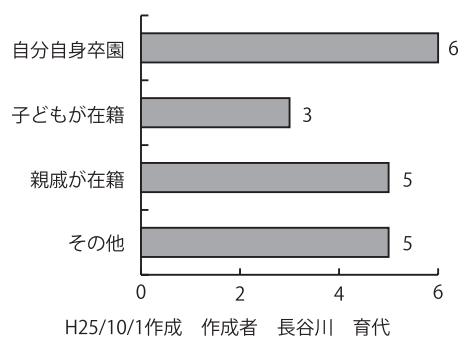
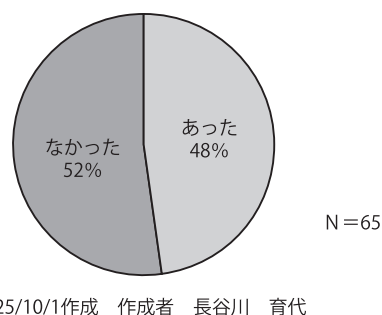


図9 過去に保育園との関わりはあるかについて

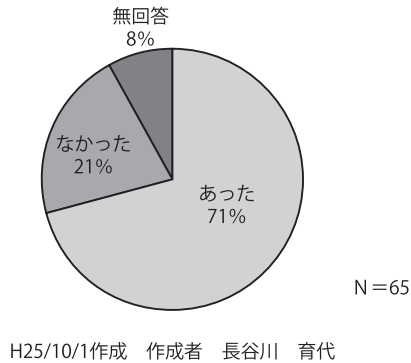


2. 保育園への意識、関心について

ここでは地域の方が保育園への意識、関心を調査した。現在65名中17名で26%の方が保育園とつながりを持ち、過去の関わりになると65名中29名で48%と高くなり、過去現在を合わせると74%の方が保育園と関わりがあった。多くの方に保育園を利用し、又保育園を理解して頂く事が出来ていたようだ。（図8-1、8-2、8-3、図9）

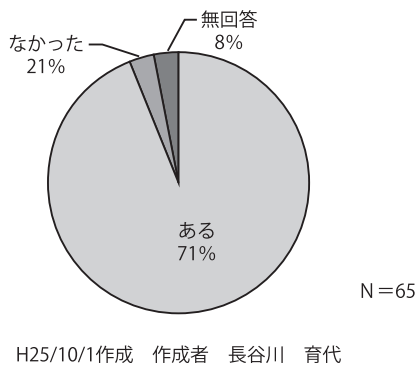
保育園で遊ぶ子どもを気にかけてことがあるかでは、気にかけてことがあるは65名中、46名で71%が子ども達の遊ぶ様子を見守ってくださっている。(図10)

図10 保育園で遊ぶ園児を気にかけてことはあるかについて



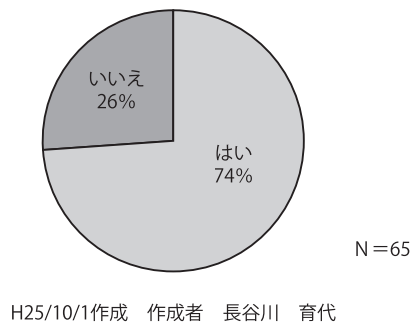
散歩中の子どもたちを気にかけてことがあるか、「ある」は65名中、61名で94%とほとんどの方に散歩の様子を見て頂いている。(図11)

図11 散歩中の園児を見たことがあるかについて



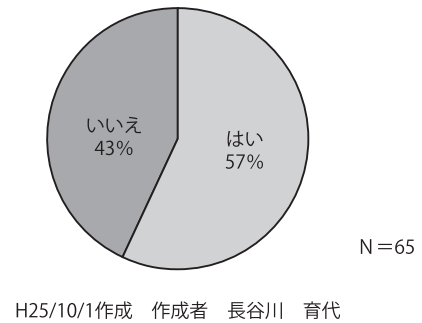
家の前が散歩コースになっている事を知っているかでは「はい」は65名中、48名で70%以上で地域の方に散歩する子どもたちや園庭で遊ぶ子どもたちを「気にかける」「子どもたちの見守り」をしてくださっている。(図12)

図12 家の前の道が散歩コースになっていることを知っているか



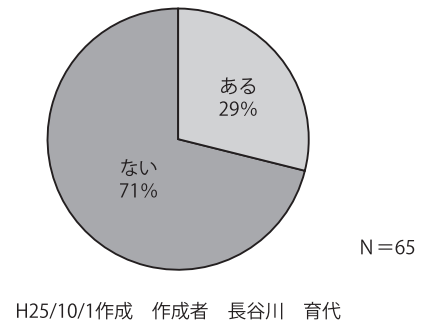
散歩中の園児と挨拶を交わしたことがあるかでは「はい」は65名中37名で57% (図13)。散歩の様子を見たことがあるが94%なので、散歩中の挨拶が十分できていないのではと感じ、散歩の挨拶の様子を研究園の職員にインタビューを試みた。14名中、全員の職員が「誰に挨拶していいかわからず全員に挨拶していない」と回答があった。散歩中挨拶を交わしたことがあるが57%と低いのは保育側にも原因がある。

図13 園児と地域の方が挨拶を交わしたことがあるかについて



保育園の行事に参加したことがあるかでは「ある」が65名中、19名で29%と低い。保育園の関わりでは現在、過去を合わせると74%であるが、保育園行事の参加になると半分以下になった。(図14)

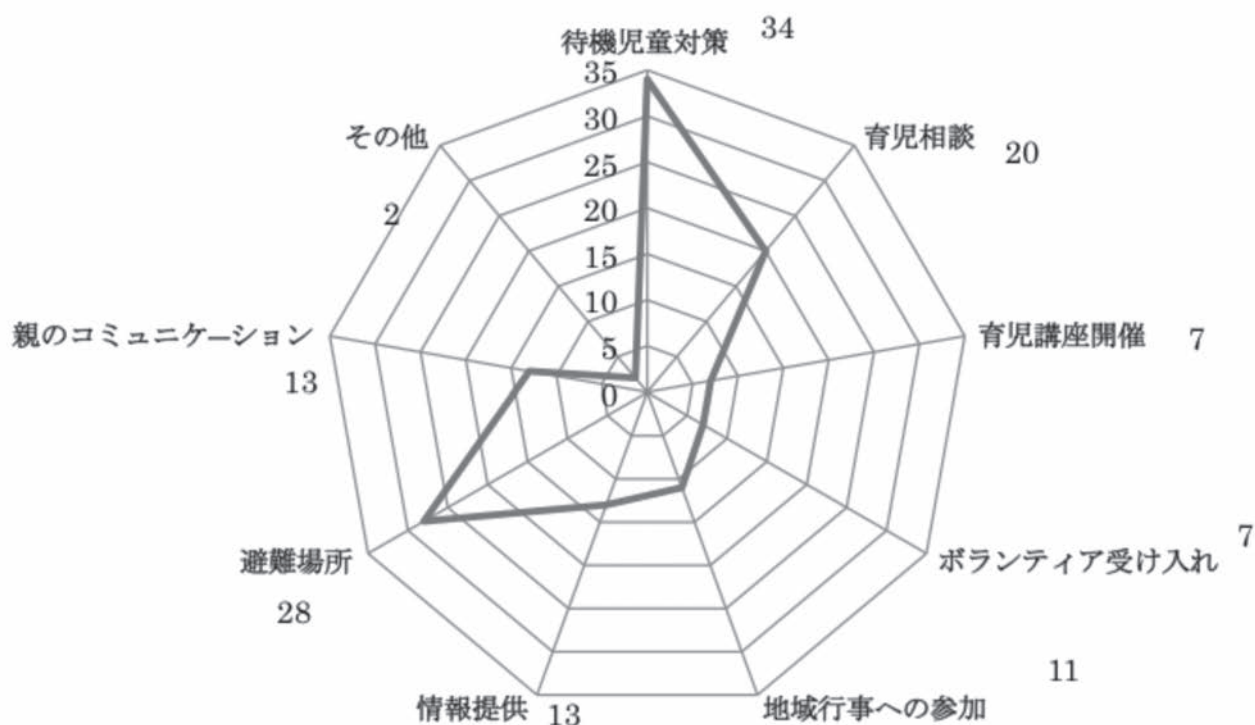
図14 保育園行事に参加したかについて



保育園に何を期待しているかでは、待機児対策が34名と最も高く (図15)、次に災害時の避難場所として28名、育児相談20名と高くなっている。待機児について研究園のある市では平成25年5月で待機児が155名。待機児対策はまだ追いついていない状態である。

避難場所については2011年3月11日東日本大震災から、様々な災害対策が行われている中、各地域で避難所体験が行われ避難所に対する関心が集まっているのではないかと。保育園に対する期待で避難所に印をつけた人は保育園の持つ機能を期待し、安心した避難所を求めているのではないだろうか。

図15 保育園に何を期待していることについて



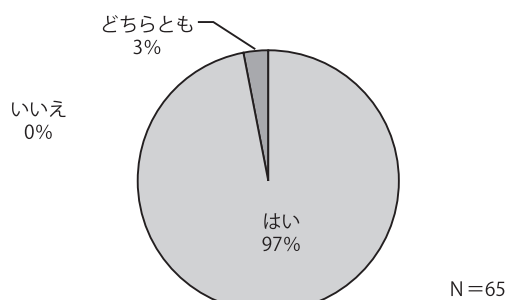
H25/10/1 作成 作成者 長谷川 育代

3. 協力いただけることについて

地域の方に保育園から協力してもらいたいことを質問してみた。散歩中の挨拶については、「はい」が65名中、63名 図16 97%とほとんど方に協力をいただくことができた。

「はい」が100%だと予想したが、「どちらともいえない」は2名で現代の地域の問題があるのではないかな。

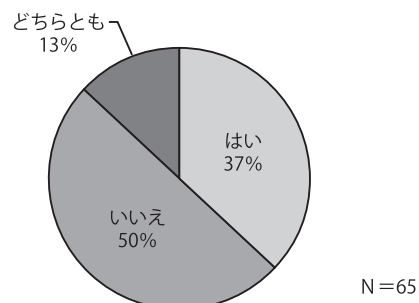
図16 散歩中の園児の挨拶に応じてもらえるかについて



H25/10/1作成 作成者 長谷川 育代

畑の野菜を見せて頂けるかでは65名中、8名が畑を持っていて、8名中3名が畑の活動に参加しても良いと答えて下さった（図17）。子ども達が畑に入ると、畑を荒らしてしまうと嫌がる方もいるので、37%でも嬉しい数字である。

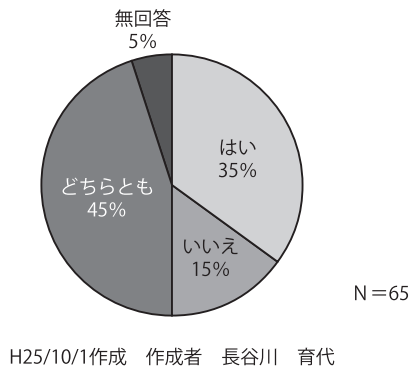
図17 園児の活動に畑に提供してもらえますかについて



H25/10/1作成 作成者 長谷川 育代

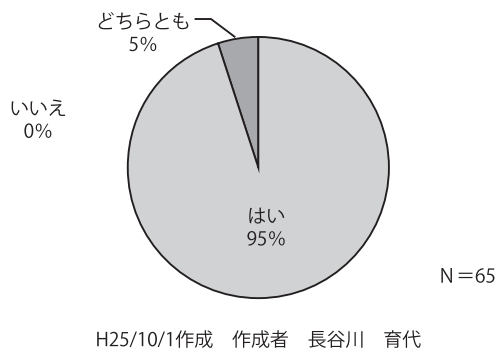
ボランティアについては「はい」が65名中、23名で40%を下回っているが、50歳以上の方については、少しゆとりができ、社会貢献を考えているのではないだろうか。（図18）

図18 ポランティアとして協力してもらえますかについて



防犯の協力について「はい」が65名中、62名で95%と高い（図19）。偶然だが同時期に自治会で『平成25年8月に地域の防犯に対するアンケート』を行ったところ371世帯中、292世帯から回答があり、約80%の回答率からこの地域の防犯に関する問題意識が高い地域と考えられた。

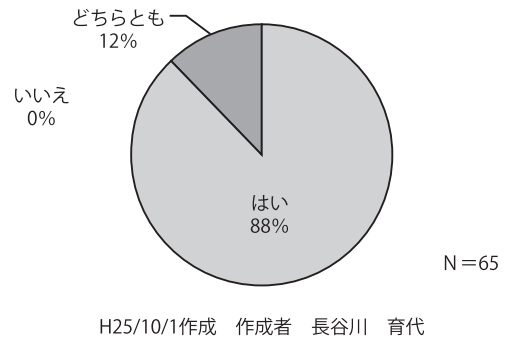
図19 防犯の協力について



緊急時にお手伝いでは「はい」が65名中、62名で88%。防犯時の協力では95%とこの地域には協力的で「良い人」が多く、子どもたちは地域で安心して過ごすことができるのではないだろうか（図20）。防犯時、と緊急時に差が7%見られた、緊急時は地域の方も同じ状態なので88%の「はい」はありがたい数字である。

『1995年兵庫県南部地震による人的被害』の調査では1995年兵庫県南部地震によると人的被害、神戸市東灘区における人命救助活動に関する聞き取り調査で阪神・淡路大震災では倒れた建物から救助された6割が「近所の人」によって救助され地域の助け合いの重要性が報告されている。今回調査した地域でも「助け合い」の機能が十分発揮されることが考えられる。

図20 緊急時の協力について



保育園を避難所として利用したいかでは「はい」が65名中、40名で62%、「どちらともいえない」が29%とこの調査のなかで2番目に高い（図21-1）。公園別で見ると、保育園から一番遠い人が答えていた。利用したい理由について「近くなので」が41%であったので避難所を考える時、近いところを考えている人が多い（図21-2）。

図21-1 保育園を避難所として利用したいかについて

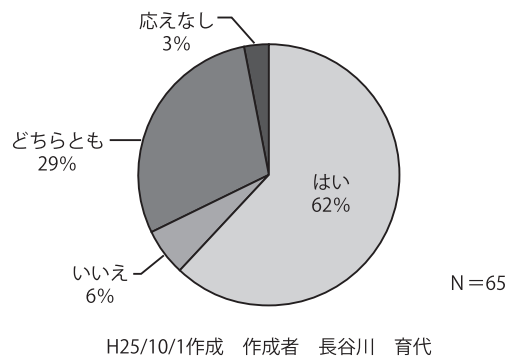
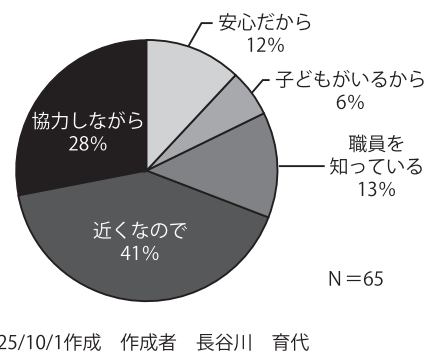


図21-2 利用したい理由について



4 地域における子どもの安心、安全への関心について

地域における子どもの安心安全の関心について「治安」（31名）、「教育」（29名）に対する関心が高かった。治安については凶悪犯罪に児童が巻き込まれ関心が高いと推測できる。

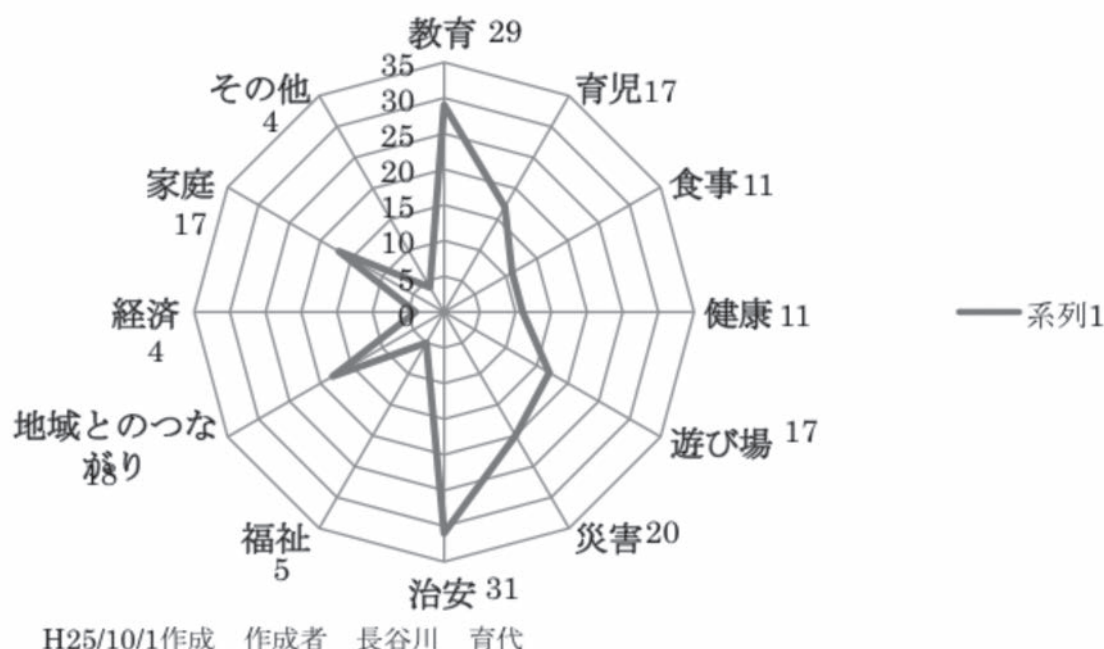
教育という分野が広いが、どのような関心があるのだろうか。「小学生白書2001年度版」によると教科や学年関係なく「社会力のある」子どもほど、楽しく勉強していて成績も良いというデータがある。子ども達は地域にでて実体験をしながら社会性を見につけることが学力の向上につながるようである。

次に災害20名、地域とのつながり18名をあげている。調査項目図15では保育園に期待する事で災害時の避難

場所として期待が大きかった。

内閣府『平成19年国民生活白書』では必要があれば気軽に話し合うような「部分的」な付き合いや、ある程度の距離を置いた付き合いを望む傾向が高くなり地域のつながりの「希薄化」が進んでいると報告されている。アンケートに答えた方も地域のつながりの変化に関心があるのではないだろうか。次に多かったのが育児、遊び場、家庭が共に17名と挙げられた。厚生労働省『子育て支援事業に関する調査（2003年）』で地域と親密な付き合いのある人は子育ての不安が少ないという結果が出ている。地域における関心については、教育、治安、遊び場、災害など「地域」が関係していることが多かった（図23）。

図23 地域におけるあなたの関心について



保育園の散歩の安全についての自由記述では19件の回答と最終ページの余白に5件の自由記述があった。

「先生も園児さんもとてまナーよく安全に散歩している様です。」

「小学生より先生の言うことを聞いてよい子だと思います。」

「大通りを渡り、自動車の通行量の多い歩道を散歩コースとして歩いているのを見かけますが、園児の数に対して保育士数が少ない様に思う。」

「園児が道路に急に飛び出した時に心配になる事がある。」

「散歩をどう位置づけるかで、安全の考え方が違ってくると思います。目的地に行くために外を歩くのか、

散歩の目的として歩くのか、後者だと、外は子どもにとって発見の連続で、手を繋いで歩くだけだとせっかくの発見を失ってしまいます。安全を第一にし過ぎる弊害もある様な気がします。（発見や楽しみ、子ども自身が自分で見守る力をつける等）でも最低限の安全の確保はもちろん大事です。バランスが難しいですね」「川の土手で遊んでいる、子ども達の一部（一人、二人）が、階段を降りて道路の方へ向かって行くところを見たことがあります。車が多い通りなのでヒヤッとします」

「保育士さんたちは人の家の前を家主がいても頭を下げず、挨拶をしない人がほとんどだと思います。だからこちらから声はかけづらいです。」（記述回答より）

など子どもたちが外に出たとき地域の方に見守っていた
だき、自由記述のように安全面を考え観察してくださ
っていることに改めて気づくことができた。第三者の目で
安全に対して記述していただいたことは保育園の安全管
理、保育、職員の姿勢など仕事の振り返りになった。

(6) 調査における考察

今回の調査では43%の回収率を得ることができ地域の
方々の子ども達に対する関心の高さが感じられる。50歳
以上の方が10年以上住んでいて、その内、主婦の方が43
%で比較的、家で過ごしている方が多い。地域の役割で
は、自治会の役員、PTAであった。地域に出たとき50歳
以上の女性に声を掛けることでつながりが持てるのでは
ないだろうか。

また、散歩している園児を94%方が見て、気にかけて
くれている。『挨拶を交わす』は97%なので、つながり
を持つ方法として「挨拶を交わす」は有効である。

『緊急を要したときの協力について』『大きな災害時の
協力について』の項目で「はい」が85%以上となっている。
保育園が地域に出た時（散歩など）の安全対策面で
積極的に働きかけることにより地域のつながりができる
下地があるのではないかと推測できる。

『保育園を避難所として利用したいか』では「はい」
が60%であった。理由として、①近いから41%、②協力
しながら過ごしたい28%、③職員を知っているので13%、
④安心だから12%、⑤子どもがいる6%があげられた。
散歩中の緊急時の協力、災害時の協力、そして避難所にな
ったときは協力して過ごしたいなど緊急時に地域の方
の協力が得られそうということが読み取れることがで
きた。

ボランティアを希望されている方も35%であった。
一方、地域の方で「子どもがいなくて保育園に入りづら
い」という方がいた。アンケートの結果から園で行われ
る行事に参加したことがあるが29%と少ないことから、
「入りづらさ」はあるようだ。

アンケート終了後、アンケートに御協力頂いた方に研
究園の運動会の招待状を出したが、当日は生憎の雨だっ
たためか来場される方はいなかった。しかし、地域の子
育て家庭は10組参加があった。子どもがいなくてやはり
入りづらさがあるようだ。

地域に出た時、地域の方とのつながりをどのように構
築していくかアンケート結果より考察する。

方法1

挨拶を交わしてくれるでは「はい」が97%と高いの
で、子どもたちが地域に出かけた時、挨拶を交わし、そ
こで交流を持つ事が大切である。「〇〇保育園の先生は
挨拶をしない」と自由記述があったが、保育園から挨拶
することを求められている。

方法2

アンケートで畑を見せて頂けるかで37%の方が「は
い」と回答してくれている。子ども達が地域に出かけた
ところで、野菜や花を見せていただくことでつながりを持
つことができる。

方法3

ボランティアの参加では35%の方が「はい」と答えて
くれた方は少ないが、地域の方の持っている力を引き出
しボランティアに参加してもらうという事が考えられる。

方法4

緊急時のお手伝いでは85%の方が「はい」と答えて
いる。緊急時逃げ込める家や災害時にお手伝いしていた
だけの人をお願いする。

方法5

地域の方から災害時の避難場所として利用したいと考
えている方がいるので、保育園は災害時の避難所とする
ことでつながりを持つ事ができる。

以上、アンケートよりまとめることができた。保育園
が中心となり地域の人とのふれあいを通じて地域のもつ
力を引き出すことができ、地域の協力で、子どもの安心、
安全な地域づくりの基盤となり「危機管理」体制を強化
していくことができるに近づく結果になっている。

田牧他の研究では地域づくりの基盤づくりとして研究
実践をあげていた。

実践1. 緊急連絡網の整備

緊急時に地域と連絡がスムーズにとれるように、連
絡網の作成をした。学校から発信ができるようにTEL、
FAX、手紙での連絡も行えるように体制作りをしている。
毎月の学校便りも届けている。

実践2. 引き取り・下校訓練

地域ごとにふれあいグループを作り訓練を行う。

実践3. ふれあい活動

ふれあい活動はふれあいメンバーで行う。「こんにち
は！宜しく集会」では地域の方の自己紹介、ゲームなど、
温かい体験をすることによって、地域の方と親近感を持
つことができる。「ふれあい運動会」保護者と、地域と、
全校生徒でふれあい体操を楽しんでいる。

実践4. 発見！子ども110番の家オリエンテーリング

ふれあいグループに分かれて、110番の家を訪ね、訪
問先で挨拶と各自の自己紹介を行っている。

実践5. 街頭啓発

啓発ポスターの作成、児童が自ら活動することで安全
の意識を高めている。

実践6. 職員の防犯訓練

侵入者が入った時の合言葉、教室で安全に待避する訓
練を行っている。

この研究では地域の方が登校時、下校時に見守ってい
ることが保護者や地域の方にも浸透し、地域のコミュニ

ケーションができてきた。子ども達に声をかけ、挨拶の指導をしながら親近感を増すという相乗効果も現れた。また学校と家庭、地域という連携が強まり、交通安全・防犯に対しての協力体制の充実を図ることができたが成果としてあげられている。

引用文献（学校と家庭、地域が連携した安全なまちづくり）田牧他 126頁～127頁

アンケートより分析したものと実践研究を比較すると保育園と小学校の違いはあるものの地域づくりの基盤となる関係構築の仕方に共通するものがあることが分かる。

研究実践3はふれあい活動の内容があげられていた。「こんにちは！宜しく集会、ふれあい運動」は学校で行われている。保育園はアンケートの結果、子どもがいないと入りづらい、行事は参加しにくいなどがあげられていたので、地域にでて「ふれあい活動」を行うことから始め、次に保育園に来てもらう仕組みを作ることが考えられた。

研究実践4は、地域では子ども達を守るために、不審者などにつけまわされた時などに避難できるよう、小学校PTA連合会が中心となり、子ども緊急避難所「ピーポーくんの家」の設置を推進している。「ピーポーくんの

家」に協力していただける方には、PTAや保護者会などを通じて登録している。小学生以上の方だったら誰でも知っている「フォーマル」なつながりである。しかし、保育園の散歩道の近隣にピーポー君の家は必ずあるとは限らないので、散歩ルートに緊急時、協力者をお願いする必要がある。

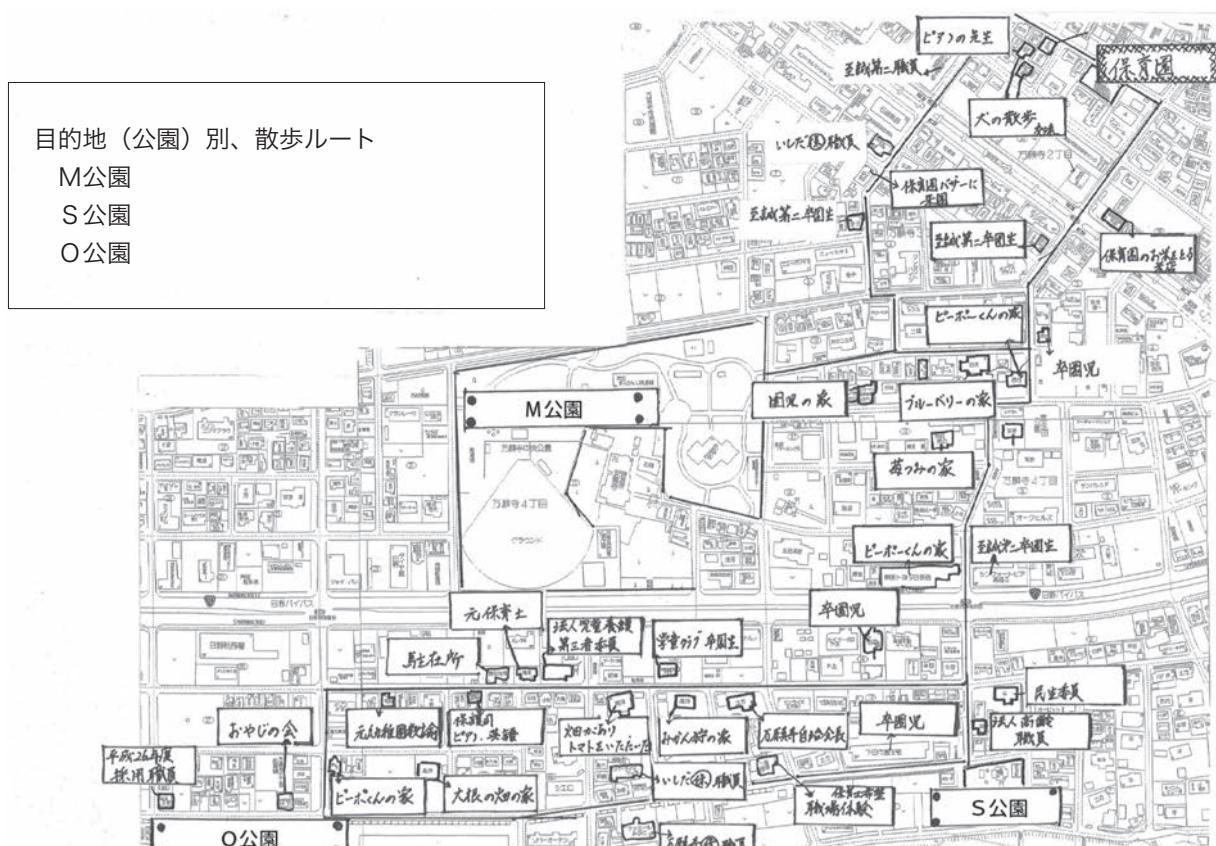
地域の調査で、卒園生、元保育士、元幼稚園教諭、散歩で保育園の前を通る人、果物の収穫をお願いしている家、保育士とつながりのある人など協力者をお願いすることができた。

保育園はフォーマルなつながりとともに「インフォーマルなつながり」を作り、子どもの見守りをお願いすることが重要でないかと考えることができた。

つながりのできた協力者を地図に示してみた。「協力者人材マップ」では公園別の協力者が明確になった。保育園の危機管理などの参考文献では「ヒヤリハットマップ」を安全管理に使用しているが、地域の協力者をマップにしている参考例は見つからなかったが、牧野の研究では協力者の連絡網を作成しているので、基盤づくりとしては同じ意味を持つものである。

地域住民と保育園がインフォーマルなつながりを持つために「協力者人材マップ」は地域の新たな関係作りの基盤となると考えられる。

表3 協力者人材マップ



Ⅲ コミュニティーサービslラーニングを通して人材育成を行う

(1) 目的

学生は地域における大切な奉仕活動という実践をし、それだけに留まらず省察と結びつけることによって、学習経験を豊かにすると同時に、市民としての責任を教え、生涯にわたる地域への貢献を育み、地域の結びつきを強化することができる。

(2) 方法

保育士養成校の学生と保育士が連携し「地域における子どもの安心・安全に関するアンケート」の配布と「地域主催の夏祭り」に参加し地域における奉仕活動の実践を行う。

(3) 参加者

大学4名 専門学校2名 (12名募集6名参加)

(4) 結果

今回の研究では学生の意識を高めるために調査の目的を共有し、同じTシャツを着て気持ちを合わせた。アンケート配布後、「地域主催夏祭り」だったのでアンケートを配布した家の人が夏祭りに来場するので、つながりを持つ仕組みができるのではないかと推測した。そのために調査書を配布したときと同じTシャツを着て夏祭りに参加したが視角による効果を期待したが結果を得る事が出来なかった。



写真1



写真2



写真3

- 写真1 アンケート配布前のミーティング
写真2 地域の方に保育士養成校の学生がアンケート配布
写真3 自治会主催地域の夏祭りに協力参加

サナ・コナリーはサービslラーニングに参加した学生に期待する成果を下記のようにあげている。

- ・仲間への配慮が増大する
- ・問題解決能力が身につく
- ・「学び」へのモチベーションが向上する

- ・自己概念が向上する
 - ・自身が向上する
 - ・新しい状況での適応を配慮ができるようになる。
 - ・地域社会への責任感が持てるようになる。
 - ・自分が役に立つ、という意識が生まれる。
 - ・新しい経験への展望を持つ。
 - ・他者とのコミュニケーションが発達する。
 - ・キャリア選択の機会への幅広い知識を持つようになるなどが期待されている。
- (関係性の学び方P101～P102)

ア、地域のアンケート配布

「子どもの安心、安全に関するアンケート」の配布は散歩コースの近道の家を1件1件訪ねお願いした。配布後の感想では

「地域にお年寄りが多く、高齢化を感じた。何かお手伝いしてあげたいと思いました」

「保育園の卒園生の家で〇〇先生にお世話になりましたと言われ、保育園の関係者ではないけど嬉しくなりました」

「受け取ってもらえなかった方がいて残念だった」

サナ・コナリーの活動を通して期待される、「自分が役に立つという気持ちが生まれた」「他者とのコミュニケーションが発達する」など成果となり、地域の実情を自ら体験し、「地域」を学ぶことができたようだ。

イ、自治会主催夏祭り

自治会主催、地域の夏祭りでは、保育士と協力してお店を出し接客を行った。その活動を経験した感想は、

「地域に目を向けることで普段とは異なる視点で子どもについて考えることができた。安全が確保されることで、安全な園生活ができると思うので、保育園と地域が連携することで子どもを守る体制がつくれることの大切さを学んだ」

「家族が毎年張り切ってお祭りに参加していたのを思い出しました。地域の方を分け隔てなく関わり、お祭りを盛り上げようとしている地域方の姿を見て、地域の温かさを感じました。」

などの感想があり、サナ・コナリーの活動を通して期待される「新しい経験への展望を持つ」「地域社会での責任感が芽生えた」学生もいた。

短い時間ではあったが地域の大切さを十分感じることができ、市民として何が大切か考察することができたようである。学生の内に地域に関わる体験環境を用意することで、将来地域に目を向け地域貢献にできる人に成長できるのではないかという感想を持った。

今回の地域を対象としたアンケート調査を実行するにあたり、保育士養成校の学生の力は大きかった。今までと関わりのなかった地域の住民とつながり、連携することは様々な問題があるが、学生の力を借り、地域との橋

渡しの役目ができるのではないかと考えられた。

平成23、24年の研究では保育資格者の認可保育所就職率向上の方策を探るための研究を行った。実習の準備をよくした学生は実習で充実感を味わい、さらに就職希望につながった。今回のコミュニティーサーブスラーニングを通し、充実感を味わい、保育士と共同作業することで、就職希望につながらないかと仮説をたてた。

ボランティア終了後、保育園での就職に関する意識調査アンケートを実施した。今回ボランティアに参加した学生6名は保育士養成校に通う学生で、内5名はボランティア経験があった。経験者はボランティア活動に慣れていて、積極的に参加し環境になれるのも早かった。ボランティア経験のない学生は1人であったが、ボランティア活動でも消極的な行動が見られた。

ボランティアの目的は、自分に合う職場を探すためだとう学生が5名中、3名で、3名は、この活動だけではなく、他のボランティアにも参加している。保育園は学生に対して奉仕活動の場を提供することも、就職率向上につながるのではないかと推測した。

今回の研究で保育士と学生が協力しながら共同作業することで保育園の就職希望につながらないか調査したかったが、調査日が夏休みで職員が作業に参加できず、施設長と共同作業だったので目的が薄くなってしまった。またボランティアの学生も12人募集したかったが半分であったため、仮説に対して説得力のないものになった。

4年生の大学の学生は就職希望をしっかりと持ち、6名中5名が保育士希望者、内1名は幼稚園も希望している。6名中1名は障害児施設に希望していた。

この活動を通して、保育園の就職希望が強くなったかインタビューしたが6名中、5名は保育園を希望したいといていたが、障害児施設希望の学生は変わらなかった。

学生が体験環境を通じて将来、地域に目を向け社会貢献ができるようになり社会に送り出すことも、保育園の役割としてできるのではないかと感想を持った。

まとめ

この研究は子どもの安心・安全のあり方、方策について地域住民を含めた人的環境から明らかにし、更にそれを強化する仕組み作りについて研究した。子ども達が地域に出た時のつながりや安全管理を考えた時「子どもの安心安全に対するアンケート」は有効的であった。調査結果をもとに「地域人材マップ」を作成することで、事故につながる事を未然に防ぐことができ、緊急時のお手伝いをしていただける家も地図に示すことができた。

保育園はフォーマルなつながりとともに、インフォーマルなつながりを構築することが大切であり、強化する仕組みとして保育園は地域の方をお願いするばかりでな

く、保育園に期待することやニーズを読み取り、それに答える事も必要である。今回のアンケート調査では、待機児対策、避難所としての要望などが挙げられていたの で真摯に受け止めていきたい。子ども達が地域の方に園外に出た時の見守りや緊急時の協力をお願いし、お互いが助け合う『50/50』のつながりを構築することでお互い居心地がよくなる仕組み作りができるのではないかと考えた。

保育園が中心となり地域の人とのふれあいを通じて地域のもつ力を引き出すことができ、地域の協力で、子どもの安心・安全な地域づくりの基盤となり「危機管理」体制を強化していくことがではないかと仮説をたてていた事が、実証されつつある。

今後の課題としては、地域の方とのつながりを強める仕組み作りを維持していくことである。

内閣府「平成19年国民生活白書」では「地域力」を高めることで犯罪率は低く、出生率が高い傾向にあるというデータがある。保育園が中心となり「地域力」を高めることで、地域と連携した、子ども達が安心、安全で過ごすまちづくりができ、その中で沢山の子どもが生まれ、生活しながら、地域の方に育て守られ、地域の方も元気に生活できる地域、日本であって欲しいと思う。

おわりに

調査を終えた2週間後、筆者が園児を連れC公園を訪れた。子どもたちと遊んでいると、アンケートに協力してくれた地域の方が通りかかり声をかけて下さった。子どもたちと挨拶を交わすと「公園の西側にスズメバチがいるので行かないほうが良い」と教えてくれた。身近な危険を教えていただいたことで事故を未然に防げることができ散歩の安全管理をする職員にとって貴重な情報であった。防犯や災害だけではなく身近な危険を教えていただいた地域の方の力は散歩に出る保育園にとって大切な力である。

保育現場における安全管理・危機管理で最も重要なことは、事件、事故を未然に防ぐことである。子どもたちが地域に出たとき、地域の方に危険な場所などを教えていただくことは、子ども及び保育活動を守る体制作りにとって重要であると考えます。

今回研究対象となった保育園は住宅街にあり地域住民との構築の仕方は述べてきたが、研究会メンバーで駅前の保育園がある。駅前ビル、マンション、店舗が多く地域の方とどのように関係構築していくのか話題となったが、駅に向かう地域の方に毎朝、挨拶運動を行い地域住民とのつながりを工夫している。

地域の実情により、地域の方のつながりの構築の仕方が変わってくるので、地域の実情を知るためのアンケートは有効な手段だと感じた。

子ども達の安全を考えると、安全を第一に考えて保育園の外に出ないでいることも安全管理になるが、園外には子ども達の発見が沢山ある。子ども達は地域にでて、地域の方に育てられながら、社会性を身に付ける大切な機会である。研究を通して地域との関係を構築することにより安全が増すことが確認できた。今後更に、研究を重ねることで子どもと地域を大切にする活動に結びつけていきたいと思う。

引用、参考文献

1. 牧野 桂一 『保育マニュアル』保育現場における安全管理と危機管理のあり方 2011年12月改訂版
2. 代表者 田牧 通 『学校の創造』学校と家庭、地域が連携した安全・安心なまちづくり 2005
3. 内閣府 平成19年版 『国民生活白書』2007年
4. 学研教育総合研究所2001年度版 『小学生白書』
5. 白河健一 脇貴志 『保育園の危機管理』須黒 義玄 2012年 筒井書房
6. 野村歡 『子どもを事故と犯罪から守る環境と地域づくり』荘村多加志 中央法規出版
7. 至誠学園グループホーム研究会 『新たな社会的養護としての地域サテライト型児童養護の実践研究』2006年
8. サラ・コナリー マージット・ミサンギ・ワッツ 『関係性の学び方』2010年 晃洋書房
9. 宮野道雄 『1995年兵庫県南部地震による人的被害』1996年、日本建築学会学術講演梗概集